

乳がん検診 一人でも多く

自らも手術経験 医師の中沢さん 「まず自分を大切に」



グループは、33歳の時に乳がんを発症した大分市の皮膚科医、中沢有里さん(39)の呼び掛けで1年前に発足した。「大分の女性を元気にする活動がしたい」という趣旨に賛同した医師仲間や薬剤師、友人らグループメンバーと一緒に今回、発足後初めてのイベントを開く。

10月は乳がん啓発のシンボル「ピンクリボン」の運動強化月間。乳がんを経験した医師が中心になって設立したボランティアグループ「ピンククロス大分」は14日午前11時から、大分市のO A Bパークプレイス住宅展示場で「ピンクリボン・デー・イン大分」を開き、乳がん検診の受診を呼び掛ける。

14日「ピンクリボン・デー・イン大分」



会場で販売するオリジナルグッズ。絵本「人と絆」は中沢さんの長男が5年生の時に描いたもの

「女性が乳がん検診を受けるときかけとなるイベントにしたい」と話すピンククロス大分の中沢有里代表

会場では、大分県応援団「鳥」のめじろんどピンクリボンを組み合わせたオリジナルグッズのマグネットやピンズ、シール、缶バッジなどを販売。製作費を除いた収益がピンククロス大分に寄付され、今後の活動資金に充てられる。アロマハンドマッサージ(先着順)やパーソナルカラー診断などのコーナーもある。

中沢さんは手術後「体の一部を失った後、私に何ができるかを考えた」。入院中にピンクリボン運動のを知り、退院後は活発に運動を展開する大阪府のNPO法人に登録。抗がん剤治療を受け

ながら仕事を続け、がん患者に向けたスキンケア講座を開くなど、自分ができることに積極的に取り組んだ。さまざまな活動を通して思いを巡らす中、つらい抗がん剤治療中には気が付かなかった家族の思いも知った。息子には病気のことを教えていなかったが、小学5年生の時に絵画教室で作った絵本には、母親が乳がんになったことが描かれていた。「ママはいつも笑っていたけど、後ろ姿を見て前と違っただけ分かっていったよ」。息子の言葉を聞き、家族のために自分自身が元気でいなければいけないと実感したという。

多忙な日々の中でがんが見つかった自身の経験を振り返り中沢さんは話す。「日本の女性は自分

ピンクリボン 乳がんの啓発活動に用いる世界共通のシンボルマーク。乳がんでつらい思いをする人を一人でも減らしたいという考えから、1980年代に米国で発祥した。日本では2000年ごろから、ピンクリボンを掲げて乳がんの早期受診を呼び掛ける活動が広まった。

(外池咲子)